

Title	ヘッドラム著 十二日史
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1915
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.9, No.10 (1915. 10) ,p.1198(122)- 1200(124)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19151001-0122

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

ヘッドラム著『十二日史』

J. W. Headlam: The History of
Twelve Days.

開戦當時の外交事情を説明せる著書論文等は本邦に於ても既に若干發行せられたれど、評者の知れる限に於ては未だ本書の如く委曲を盡せるものはあらず。本書は題して『一九一四年七月廿四日より八月四日まで十二日間の歴史』。一名公文書に基ける開戦前外交記事』と云ひ菊判四百頁の大冊子にして、之を二編に分ち、第壹編十三章は塙塞關係に筆を起して獨逸と露佛兩國との開戦までの交渉を詳述し、第貳編四章は白耳義中立侵害、英國交戦參加の事情を説明せり。英國政府が先頃一九一五年度青書雜の部第十號として『開戦關係外交文書大全』 Complete

Diplomatic Documents Relating to the Outbreak of the European War (價壹志)を出版し、一冊子のうちに英佛白露獨諸國政府發表の公文書は勿論塙國の『紅書』塞國の『青書』の英譯をも網羅し、且以上の諸國が最近に於て發表せる續篇をも收めたるより開戦當時の外交關係研究者には極めて便利となれるが、本文五百四十四頁の公文書集に對しては或は亡羊の嘆なき能はざる可し。然るにヘッドラム氏は以上の公文書を悉く精讀し十分に咀嚼し、交渉發展の次序を追ひて外交文書を收録しあれば、一度本書を繙く時は容易に彼の時日を顛倒して駁辯を試むる獨逸政府の詐術を看破し得可きなり。

ヘッドラム氏はケムブリッヂ大學の出身にして教育院に於て中等教育視學官の職にあれど、史學の造詣も亦深く、曾て伯林大學に遊學せるより『ビスマーク傳』『獨逸帝國再興史』等の著書あり、『大英百科全書第十一版』の獨逸兩國の歴

史傳記等も多く氏の執筆に係れり。蓋し英國の現代歴史家に於て最も獨逸の事情に精通せるものの一人にして、彼の藏相ヘルフェーリヒ氏の著書をはじめ獨逸側の開戦責任論をも十分に參照せるものゝ如し。獨逸兩國就中獨逸政府の公表せる外交文書極めて貧弱にして、著者も遺憾とせるが如く獨逸兩國交渉の真相を詳にし難きものありと雖も、思ふに兩國政府の間に交換されたる公文書は當分秘密のうちに封せらる可ければ、本書は開戦當時の外交史として永くその價值を減することなかる可し。或はこの秘密の暴露は燃犀なる史眼を以て各國政府の外交文書を研究して得たるヘッドラム氏の結論を證明するに過ぎざらん。

本書は六月中旬の發行なるが、『タイムス』の書評週報は七月九日號に於て初めて之を紹介せり。是れ評者が精讀の後にあらずれば容易に之を月旦せざるが爲めならん。然るに本年度の『政

治家年鑑』が大戦參考書目のうちに既に本書を掲げたるは機敏の至りなり。蓋し著者の信用高くして發行前より大に期待を屬されしが爲ならん。英國が塙塞交渉の當初より兩國同盟と一致行動を執る可しと聲明せんことを要求せられしも、之に應ぜざりしに付いては、殊に佛國に於て非難の高きものありき。この非難に對し英國側に於ては或は英國の政體之を許さずと云ひ、或は若し英國にして倉皇かゝる聲明を爲さんか却て獨逸の戰意を挑發せしならんと云へるが、この點に關してはヘッドラム氏も極力英國の爲に辯ずる所あり。然れども八月一日に至り英國皇帝がポアンカレ大統領に答へて聲明の困難なるを説き之を拒絶せしことを叙するや、氏は當時の事情に於てはかく回答するの外なかりきと云へるが、更に語を續けて、『而も吾人はこの瞬間に於て右の回答以上に出づるを能はざりしことを深く遺憾なりと感ずるものなり』と云へ

り。評者が氏の論断に敬服するはかゝる公平なる意見の散見するが爲なり。一〇三頁にサー・エドワードが駐獨大使官参事官に寄せたる文書の第一節に獨佛伊とある可きを獨佛露とせるは既にその誤謬なることを『開戦關係外交文書大全』には指摘しあり、然るに本書は『青書』の當初の誤を訂正せず、又二四一頁に於てはデオリツチを伊國外相となせり。されどかゝる大著に於て若干の誤謬あるとも之を咎むるこそ寧ろ非常識ならめ。

但し最後に一言し度きは本書の表題なり。今回の大戦若し人類の凶事なりとせば、寧ろ之をThe History of Thirteen Days と改めたる方趣味深きにあらざるか、十三の数は歐米人が一種の迷信より凶兆として忌む所、而して戦端破裂を促したる外交上の交渉は本書の表題に示すが如く七月二十四日に開始されずして、七月二十三日埃國政府が塞國に對して最後通牒的なる外

交上の覺書を提出したるに始まるに於ておや。抑も亦碩學ヘドラム氏にも亦この十三の数を忌むの迷信ありて、戦役終局の結果の協商側の勝利にあらんことを期待しつゝ、故ら『十三日間の歴史』と命名することを避けたるにや。

高島佐一郎著『金融の原理』

大正四年九月東京實業文館發行
菊版三百九十八頁定價壹圓五拾錢

本書はバーカー氏著『現金と信用』を補譯せるものなり。

バーカー氏(D. A. Barker)の原著 Cash and Credit (千九百十二年倫敦出版)は劍橋大學科學文學叢書の一冊として上梓せられし一小冊子なるが、平易達意の文章を以て貨幣と信用の關係、金融の原理、外國爲替の原理、英蘭銀行と金融市場との關係を明快に説述せる一好著なり。殊に信用並に國際金融の原理の圖解は著者獨特の考案に係るものにして、複雑なる是等原則の了解に資する所少からず。

補譯者高島氏は東京高等商業學校專攻部に於て金融論を攻究せられ、數年前卒業せられてより暫らく中央大學に於て銀行論等を講義せられ、昨今は小樽高等商業學校に於て主とし

本書は貨幣鑄造、紙幣發行の技術、又は銀行の組織、經營等の技術を説明するものに非ずして、一國內並に國際間に於ける信用伸縮の根本原理を説明するものにして、苟くも實業に興味を有し、實業と金融との關係の密接なるは恰も身體と血液の循環との關係の密接なるに異ならざるを知らる者の座右に備ふ可きものなりとす。

小泉信三 共譯『戰爭是非』

大正四年九月慶應義塾出版局發行
四六版百三十一頁定價金三十五錢

今次歐洲の大動亂に参加せる歐洲大陸の諸強國並に諸弱國は皆な乾坤一擲混戰以て各々社稷の長久を圖りつゝあるに、獨り對岸の英國はグレー氏の外交が開戦の導火線たりしにも拘らず從容として迫らざるの概あるのみならず、其國民の動作より之を視るも、將た又其の態度輿論に就きて之を徴するも大陸諸交戰國に於けるが如き舉國一致は之を見ることを得ざるなり。彼の宣戰の當時二三内閣員の掛冠せるが如き、義勇兵募集の振はざるが如き、軍需品製作運輸に甚大の影響を及ぼすことを顧みずして炭鐵夫が同盟罷業を企てしが如き、又徴兵制度施行に關する朝野輿論の一定せざるが如きは少く

て金融論の講座を擔任せられつゝあり。氏は最近數年間に於て幾多學術雜誌に於て或は外國知名の學者の筆に成る金融論を紹介し、或は此問題に關する氏獨特の研究を發表せられし篤學者にして、本誌も既に數回氏の論文を掲出するの榮を得たるは諸者の記憶する所なる可し。されば、氏はバーカー氏著述の紹介者として頗る適任なりと云はざる可からず。加之、高島氏は單にバーカー氏著書の内容を譯出するに満足せずして、バジョット、クレア、ニコルソン、キーンズ、フィッシャー、コナント、オプスト、ヤツフェ、リーサー等の貨幣銀行論の大家の説を參照してバーカー氏の説を敷衍し、加ふるに自家の見解を挿みて内容を充實するに努めたる結果、高島氏の補譯は分量に於て原著の約二倍に相當するが如し。但し補譯は原書の章節を追へるを以て、全體の結構はバーカー氏の著書と同一なりと云ふを得るが如し。

本書は更に附録として『イコノミック・ジャーナル』誌主筆ジョー・エム・キーンズ氏の筆に成る二論文 (The City of London and the Bank of England, Aug 1914 並に The Prospects of Money, Nov. 1914) を附載し、本文に於て解説せる金融の原則が今次の大戦に際して英國に於て如何に働きつゝあるかを示すの一助とせり。補譯者の用意周到なる之を以ても察知するを難しとせず。